

農作物技術情報 第8号 花き

発行日 平成23年10月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんどうの収穫後の残茎葉処分、ほ場の排水対策を徹底しましょう
- ◆ 小ぎくの良質苗確保のために、計画的な親株管理をしましょう
- ◆ 来年の作付けに向けたほ場の管理・土壌の改良を行いましょう

りんどう

1 本年の生育概要

現在、極晩生種の出荷も終盤となり、本年のりんどうの出荷も終わりとなります。昨年ほどではありませんが本年も夏期高温の影響を受け、各地でリンドウホソハマキ、オオタバコガの被害が遅くまで続きました。病害では、県南部を中心に9月以降黒斑病が多発しました。

2 収穫後の管理

(1) 茎葉の除去

茎葉がほぼ枯れたほ場では越冬芽を傷つけないように刈り払いを行います。ほぼ枯れた状態に限り刃物を使っても構いませんが、晩生・極晩生種等茎が完全に枯れていない場合は手で折り取るようにしてください。また、リンドウホソハマキが発生した圃場では、残茎に侵入している可能性があります。花腐菌核病も残茎により来年の発生源になりますので、残茎は集めて圃場から持ち出してください。

(2) 雑草防除

翌春の雑草対策や害虫の越冬場所を減らすためには、秋のうちに圃場内外の除草等の雑草対策を行うことが効果的です。

(3) 圃場管理

ア 株の保護

特に、極早生、早生系統の根張りが少ない品種では塊茎が土壌表面に浮き出る傾向にありますので、積雪の少ない地域では凍寒害を受けやすく、株落ちの原因になります。また、りんどうは越冬芽の付け根から毎年新しい根を発生させるので、露出した状態では新たに根を伸ばせなくなり、株が衰弱します。この対策としてマルチをはがし管理機等で通路の土を越冬芽が隠れる程度に土を寄せ、株を保護します。あるいは、株元に土を置いて株を保護します。

イ 堆肥施用

りんどう圃場への堆肥施用は、秋施用が効果的です。畦にたい肥をのせる場合、よく腐熟して水分が少ないものを用いること、多く施用し過ぎないように注意します。なお、使用する堆肥については、「農作物技術情報 稲わら・堆肥等の利用について」をご覧ください。

ウ 排水対策

雪解け水が、ほ場内に溜まらないように、排水路を確認します。

3 株更新

安定した収量を確保するためには計画的なほ場更新を行い、健全な株を維持することが重要です。採花年限は5年程度とし、養成期間を考慮して計画的に株更新を進めましょう。来年新植を予定しているほ場では秋のうちに堆肥3～4 t/10aを施用し、粗起こしや明きよの整備等を行います。また、土壌診断を行い、施肥設計の準備をしましょう。

小ぎく

1 本年の生育概要

10月咲品種もほぼ終了となり、親株の伏せ込み作業が始まります。本年は、一部地域では若干開花が遅れた時期がありましたが概ね順調に出荷され、出荷量は伸びたと思われます。また、昨年に引き続きオオタバコガによる被害が発生し、来年以降も継続して注意が必要です。

2 栽培計画

翌年の栽培に向け、各品種の開花期や特性を整理します。そのうえで品種構成や作付面積を決定し、必要な親株の数量を確保します。

3 親株管理

(1) 伏せ込み

ハウスへの親株伏せ込みは遅くとも1月上旬頃までに行います。伏せ込み後はトンネルで被覆し、できるだけ早く活着させます。伏せ込みには親株、かき芽、冬至芽などの方法がありますが、品種特性や作業方法に合わせて選択し、挿し穂数が確保できるようにします。親株での伏せ込みは、作業は少なく済みますが、病虫害の持込みに注意します。

また、冬至芽での伏せ込みは手間はかかりますが、その後の芽が揃い、挿し穂が揃います。

(2) 活着後の管理

活着を確認したら、その後はハウスを開けて換気し、できるだけ低温にあてます。このときの低温が不十分だと、冬至芽の発達が遅れ、採穂数の減少につながります。

(3) 保温開始

新芽を伸ばして採穂するため、トンネル等による保温を行います。保温を始める時期は地域や気象条件、品種によって異なりますが、8月咲き品種の場合概ね1月下旬から2月上旬頃となります。定植の時期から逆算して保温開始時期を設定します。

施設栽培

1 厳寒期の管理（保温性の向上）

ハウスの被覆資材の状態を確認し、隙間を無くするとともに破れなどは修繕します。また、内部被覆を二重、三重にすることや、アルミ蒸着フィルムなどの保温性の高い被覆資材の追加等により保温性を確保します。また古い資材を新しいものに替えて日射の透過性を高めることも有効です。

2 病虫害防除

(1) ハウスを閉め保温を開始すると、内部の湿度が高くなり、灰色かび病等の病害の発生がしやすい環境となります。できる限り、晴れた日中は換気を励行します。また、循環扇等を利用して空気を循環させることは、室内温度の均一化のほか、灰色かび病などの病害防除にも有効です。

(2) 施設内の害虫は、露地と異なり増殖・越冬しやすくなります。日頃から作物への寄生状況を確認して発生初期の防除に努めましょう。

来年の栽培に向けて

1 来年の作付けに向け、ほ場の整理や準備を行いましょ

(1) ほ場の排水対策の実施

(2) 土壌診断の受診と結果に基づく土壌改良、酸度矯正、施肥設計

(3) 被覆資材の除去や多量かん水、クリーニングクロープの導入による塩類集積対策

(4) 育苗施設でのウイルス病等の感染源越冬防止のため、ハウス内雑草、不要な株等の整理

2 来年の栽培計画を立てましょ

本年度の反省を踏まえた、品目や品種、作型の組み合わせ、作付面積、ほ場の利用計画。

農作物技術情報の23年度定期発行は今号で終了となります。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間

農作業 無事故でつなぐ 明るい未来